資生堂パーラー コラボレーション

資生堂を象徴するデザインとして、現代まで引き継がれる資生堂唐草文様。この文様は、オーブリー・ビアズリーの作品から着想を得たオリジナルで、当時の意匠部の手によって連続模様化されたものです。偶然にも、資生堂の創業と同年に誕生したビアズリー。流星のごとく現れて散ったビアズリーが生み出したデザインは、時代と国を超えて現在も色あせることなく受け継がれています。そんな両者が出会う場として、本展との特別なコラボレーションが実現しました。

ラ・ガナシュ6個入
777円

3層の味と食感をお楽しみいただける、ひとくちサイズのリッチなチョコレートです。ノワール、ブランの2種。ビアズリーの作品に着想を得た資生堂唐草をモチーフとした、展覧会オリジナルデザインパッケージ。

金平糖
665円

職人が昔ながらの伝統を守り、14日間もかけ結晶化させて作り上げた金平糖です。ビアズリーの作品に着想を得た資生堂唐草をモチーフとした、展覧会オリジナルデザインパッケージ。

※価格はすべて税込

オリジナルグッズも鋭意準備中!

詳細はWEB サイトでお知らせいたします。

4月6日は開館15周年記念日!

4月5日は20時まで開館を延長し、4月11日まで15周年ウィークとしてイベントを実施。周年企画や講演会等、本展に関するイベント情報は、イベントページにてご確認ください。

Café 1894 タイアップメニュー

【ランチコース】
ビアズリー　白と黒　2,800円

・オードブル：真鯛とクスクスのサラダ
・メイン：国産牛ハンバーグステーキ

本展のメインビジュアルにも採用された、ビアズリーの《クライマックス》から着想を得たメニューです。コース全体に散りばめられた白と黒にも注目してお召し上がりください。

【カフェタイムデザート】
異端のティラミス　1,400円

ビアズリーの得意とする白と黒の対比と、《アーサー王は、唸る怪獣に出会う》から着想を得て、デザートとして再構成。リッチでボリューミーなマスカルポーネが、王道とは一味も二味も違う、病みつきになる魅力をもつティラミスに仕上げています。

【ディナーデザート】
パルフェ《クライマックス》　2,000円

一日のクライマックスにふさわしいメニュー。ビアズリーが残した数々の作品の余韻と共にお楽しみください。

※価格はすべて税込

異端の奇才 ── ビアズリー

2025年4月6日は開館15周年!

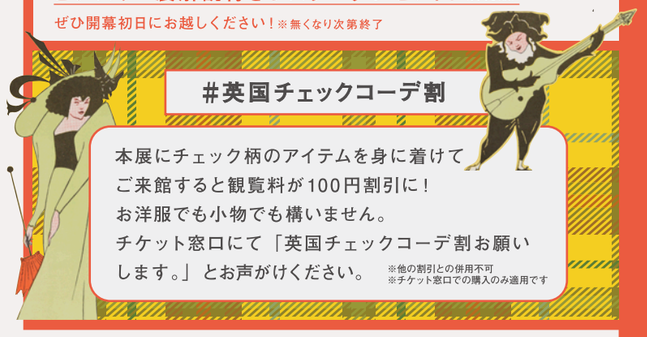
会　　期	2025.2.15(土)－5.11(日)
開館時間	10:00－18:00 祝日を除く金曜日と会期最終週平日、第2水曜日、4/5は20時まで 入館は閉館時間の30分前まで
休 館 日	月曜日　但し、[トークフリーデー：2/24、3/31、4/28]、5/5は開館
観 覧 料	一般：2,300円　大学生：1,300円　高校生：1,000円 ※障害者手帳をお持ちの方は半額、付添の方1名まで無料

Beardsley, a Singular Prodigy

Dates: Saturday, February 15, 2025 – Sunday, May 11, 2025
Venue: Mitsubishi Ichigokan Museum, Tokyo
Hours: 10:00-18:00 [-20:00 on Fridays, the second Wednesday of the month, April 5(Sat.) and from May 7(Wed.) to 9(Fri.)]
*Last admission is 30 minutes prior to closing time.
Closed: Mondays [except February 24, March 31, April 28, May 5]
Admission fees: Adult ¥2,300　University students ¥1,300
High school students ¥1,000

開幕記念・数量限定!
ビアズリー展解説付きポスタープレゼント!（非売品）

ぜひ開幕初日にお越しください！※無くなり次第終了



#英国チェックコーデ割

本展にチェック柄のアイテムを身に着けてご来館すると観覧料が100円割引に！
お洋服でも小物でも構いません。
チケット窓口にて「英国チェックコーデ割お願いします。」とお声がけください。

※他の割引との併用不可
※チケット窓口での購入のみ適用です

〈オンライン販売〉
・前売一般：2,100円　大学生：1,000円　～2月14日まで販売。
・平日限定チケット：1,900円　利用可能日：2/18(火)～3/14(金)の平日

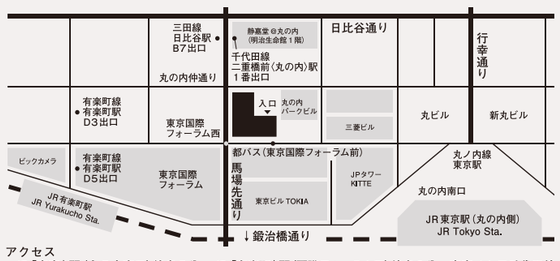
ビアズリー偏愛パス　5,000円

ビアズリーの世界をこころゆくまで堪能したい貴方へのパスポート。
本展会期中何度でもご入場が可能です。
※オンラインにて「「ビアズリー偏愛パス」引き換え券」をご購入の上、チケット窓口で引き換えが必要です

〈チケット窓口〉
・毎月第2水曜日「マジックアワーチケット」：1,600円
当日の17時以降に当館チケット窓口でのみ販売します。

※価格はすべて税込

併せて小企画展「江戸から東京へ（仮称）」もご覧になれます。詳細はhttps://mimt.jp/small-gallery/をご確認ください。



アクセス
・JR「東京」駅（丸の内南口）徒歩５分・JR「有楽町」駅（国際フォーラム口）徒歩６分・東京メトロ千代田線「二重橋前〈丸の内〉」駅（１番出口）徒歩３分・東京メトロ有楽町線「有楽町」駅（D3/D5 出口）徒歩６分・都営三田線「日比谷」駅（B7 出口）徒歩３分・東京メトロ丸ノ内線「東京」駅（地下道直結）徒歩６分
〒100-0005 東京都千代田区丸の内 2-6-2 お問い合わせ：050-5541-8600（ハローダイヤル）

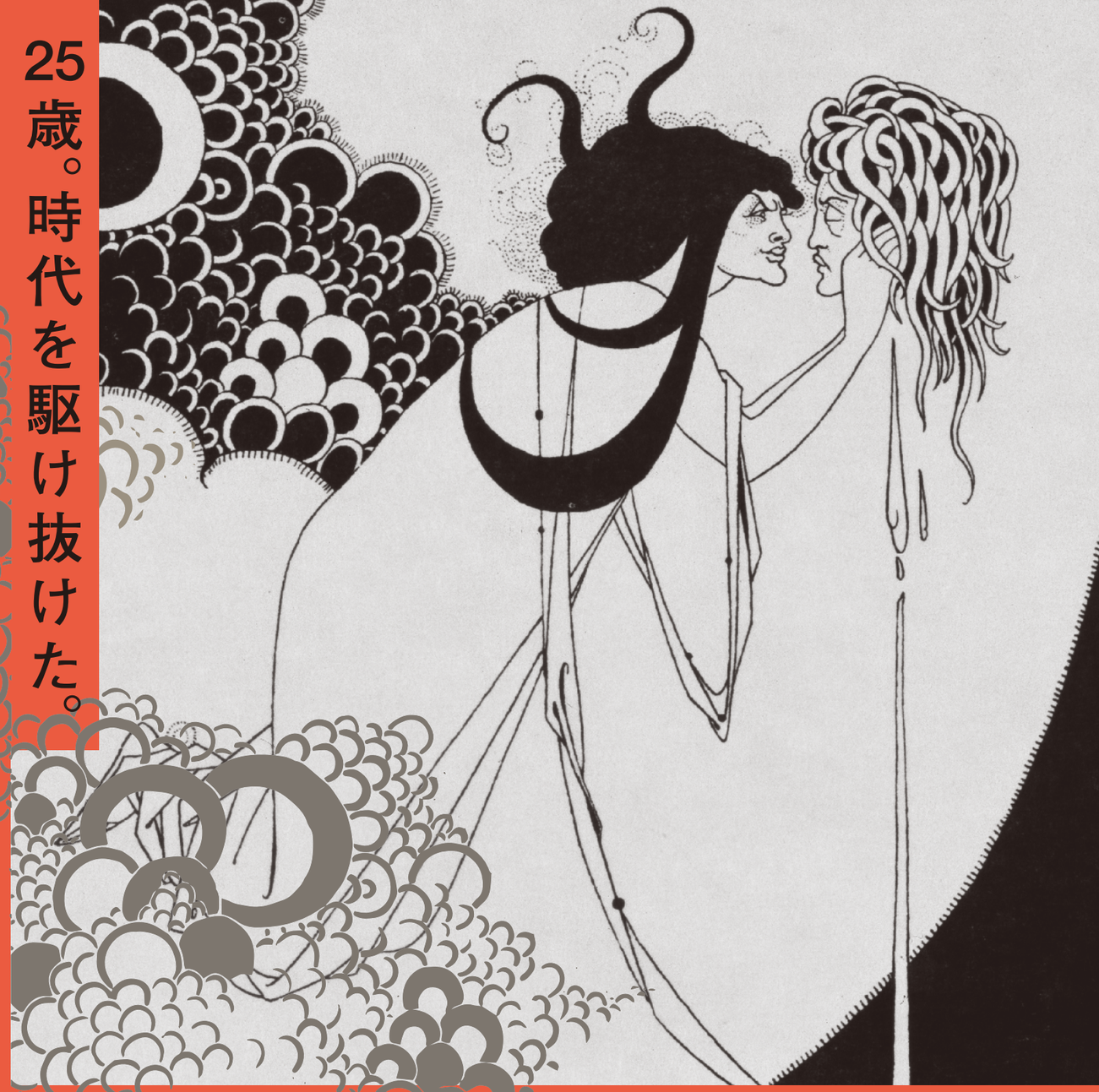
三菱一号館美術館
MITSUBISHI ICHIGOKAN MUSEUM, TOKYO

主催：三菱一号館美術館、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館、朝日新聞社
後援：ブリティッシュ・カウンシル　協賛：DNP大日本印刷　協力：日本航空

表面：オーブリー・ビアズリー《クライマックス》1893年（原画）、ライン・ブロック／ジャパニーズ・ヴェラム［厚地和紙］、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 Photo: Victoria and Albert Museum, London

人を、想う力。街を、想う力。三菱地所

25歳。時代を駆け抜けた。



異端の奇才
ビアズリー展

Beardsley, a Singular Prodigy　2025.2.15(土)－5.11(日)

三菱一号館美術館　MITSUBISHI ICHIGOKAN MUSEUM, TOKYO　A V&A Exhibition – touring the world　V&A

25歳で世を去った画家オーブリー・ビアズリー。この英国の異才は、ろうそくの光をたよりに、精緻な線描や大胆な白と黒の色面からなる、きわめて洗練された作品を描きつづけました。本展覧会は、19世紀末の欧米を騒然とさせたビアズリーの歩みをたどる、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（V&A）との共同企画です。出世作のマロリー著『アーサー王の死』（1893－94）や日本でもよく知られるワイルド著『サロメ』（1894）、後期の傑作ゴーティエ著『モーパン嬢』（1898）をはじめとする、初期から晩年までの挿絵や希少な直筆の素描にくわえて、彩色されたポスターや同時代の装飾など、約220点を通じてビアズリーの芸術を展覧します。

The artist Aubrey Beardsley (1872–1898) enthralled late-nineteenth-century Victorian society with his highly elegant style characterized by bold black-and-white compositions and fine lines before his death at the age of 25. In collaboration with the Victoria and Albert Museum, this exhibition traces the artistic career and life of the English prodigy through approximately 220 works, including not only masterpieces such as his illustrations of Oscar Wilde's *Salomé* (1894), well known even in Japan, but also rare sketches, colored posters, and decorations from the era.

1

2

3

4

5

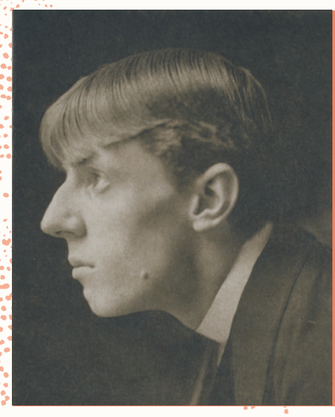
6

1：《詩人の残骸》1892年、ペン、インク、ウォッシュ／紙、34.0×12.3 cm（画寸）、36.7×13.8 cm（紙寸）
2：《「ジークフリート」第2幕》1892年、ペン、インク、ウォッシュ／紙、35.5×28.5cm（画寸）、41.1×30.1cm（紙寸）
3：《アーサー王は、唸る怪獣に出会う》1893年、ペン、インク、ウォッシュ／紙、37.8×27.0 cm（画寸）、39.8×28.6 cm（紙寸）
4：《孔雀の裳裾》1893年（原画）、1907年（印刷）、ライン・ブロック／ジャパニーズ・ヴェラム［厚地和紙］、34.4×27.2cm（紙寸）
5：《サロメの化粧Ⅱ》1893年（原画）、1907年（印刷）、ライン・ブロック／ジャパニーズ・ヴェラム［厚地和紙］、34.4×27.2cm（紙寸）
6：《クライマックス》1893年（原画）、1907年（印刷）、ライン・ブロック／ジャパニーズ・ヴェラム［厚地和紙］、34.2×27.2cm（紙寸）
1～6：オーブリー・ビアズリーの作品
ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館
All Photos: Victoria and Albert Museum, London

学術監修・河村錠一郎氏コラム「異端としてのビアズリー」

時空を超えた想像力の働きが、えっ？！ともぎょっ！ともいわせる魅力のイメージを造形している。しかも美しい。現実に深く根ざしながら現実を否定する、神を愛するから神を拒絶する、異端の極限。その代表作がワイルドの戯曲『サロメ』の挿絵群、そして使用を拒否された表紙デザイン。巻末のサロメ埋葬の装画―哀感に満ちた美しさはどうだろう！奇怪な登場者はもちろん、そもそもワイルドの原作にはない場面だ。ビアズリーはワイルドを超えている！

他のコラムはこちら



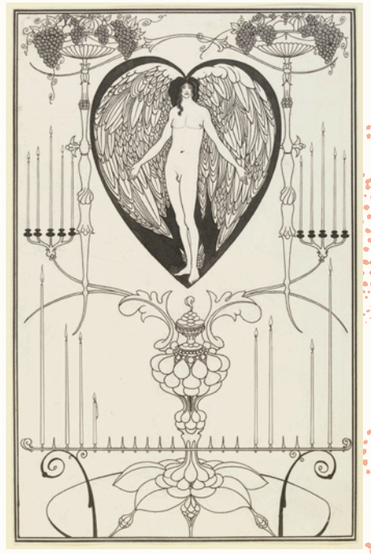
オーブリー・ビアズリー（Aubrey Beardsley, 1872-1898）

ブライトン出身。家計を支えるため 16 歳から事務員として働き、夜間に制作活動を行った。T.マロリー著『アーサー王の死』（1893-94）やO.ワイルド著『サロメ』（1894）の挿絵で成功してからも、ろうそくの光のもとで絵を描いたのは、その名残といえる。1895年にワイルド裁判の余波で『イエロー・ブック』美術編集の職を失うが、季刊誌『サヴォイ』（1896）やA.ポープ著『髪盗み』（1896）の挿絵で新境地を見せた。幼少期からの肺結核により25歳で他界。

フレデリック・エヴァンズ《オーブリー・ビアズリーの肖像――横顔》
1894 年頃、フォトグラヴュール、122.0 x 99.0 cm
ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館　Photo : Victoria and Albert Museum, London

7

8


9

みどころ 1

生きざま含めて全部見せます！ビアズリーの大回顧展！

彗星の如くあらわれ時代の寵児に。早すぎる転落から最晩年の進化まで、凝縮された画業をご覧あれ。

みどころ 2

ビアズリーの初期から晩年の作品まで網羅！

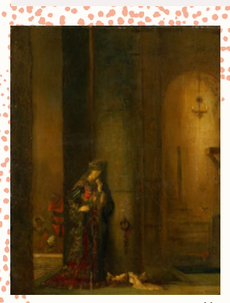
約220点が一堂に。直筆は約50点！

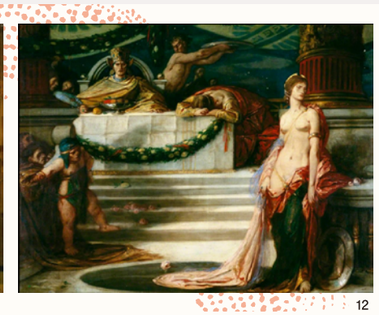
みどころ 3

ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（V&A）全面協力！

世界有数のビアズリー・コレクションを有するV&Aから150点が一挙来日。

10


11


12

オスカー・ワイルド（Oscar Wilde, 1854-1900）

ダブリン出身。グローヴナー・ギャラリー開館時の展覧会評で一躍、時の人となる。挑発的な言動のみならず、長髪の容貌や最先端の洒落た装いでも知られ、唯美主義運動の広告塔として、1882 年には米国で講演旅行を実施した。代表作に『幸福の王子』（1888）、『ドリアン・グレイの肖像』（1891）、『ウィンダミア卿夫人の扇』（1892）、英訳版『サロメ』（1894）。1895 年、同性愛の罪で収監され、2 年の服役後は渡仏するが、再起は叶わなかった。

チャールズ・リケッツ（Charles Ricketts, 1866-1931）

スイスのジュネーヴ出身。生涯の友 C. シャノンとともに暮らし、本の装丁や挿絵を共同で手がけ、1889 年には芸術雑誌『ダイアル』を創刊した。同誌を高く評価したワイルドに見込まれて英訳版『サロメ』をのぞく全著作の初版時の装丁や挿絵を担当した。

7：《アヴェニュー劇場公演の宣伝ポスター》1894年、リトグラフ（多色）、74.9×51.9cm（紙寸）
8：《「キーノーツ叢書」の宣伝ポスター》1893年（原画）、1966年（復刊）、リトグラフ（多色）、47.9×34.4cm（紙寸）
9：《愛の鏡》1895年、ペン、インク、グラファイト、水彩／紙、26.2×17.5cm（画寸）、27.4×17.7cm（紙寸）
10：エドワード・ウィリアム・ゴドウィン《ドロモア城の食器棚》1867-86年、カシ、真鍮、181.2×129.2×49.5cm、豊田市美術館
11：ギュスターヴ・モロー《牢獄のサロメ》1873-76年頃、油彩／カンヴァス、40.0×32.0 cm、国立西洋美術館、松方コレクション
12：チャールズ・リケッツ《サロメ》1925年、油彩／カンヴァス、91.5×118.0 cm、ブラッドフォード地区美術博物館　Photo: Bradford Museum & Galleries/Bridgeman Images
7～9：オーブリー・ビアズリーの作品
ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 7～9 Photos: Victoria and Albert Museum, London